Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 鉄くず・鉄くず屋をめぐるフィールド調査から : 在阪「沖縄人」の戦後生活史研究に向けて |
| Author(s) | 上地, 美和 |
| Citation | 日本学報. 2014, 33, p. 53-69 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/27046 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 鉄くず・鉄くず屋をめぐるフィールド調査から
## ――在阪「沖縄人」の戦後生活史研究に向けて――

上　地　美　和

はじめに
第１章　鉄くず屋の経験
第２章　鉄くず、鉄くず屋とは
第３章　鉄くず屋という生業をめぐる「沖縄人」の思い
終わりに

### はじめに

私は大阪で育った「沖縄人」[1)]である。実家の家業はスクラップ屋で、近所に住む親戚の多くも、スクラップ屋である。スクラップ屋というのは、主に鉄くずを売買する商売のことである。自分が「沖縄人」であることと、「沖縄人」が生業としているスクラップ屋を営んでいること、この二つの点について考察することが、本稿の課題である。

この二点について、自分の経験を紹介しよう。自分が「沖縄人」であるという「客観的事実」も、幼少のときから自然に身に付いたことであるため、普通のことだと思っていた。しかし、成長するにつれ、自分が「沖縄人」であること、また家業がスクラップ屋であることは、社会的に何か特別な意味をおびているのではないか、と思い始めた。

私が「沖縄人」であることについては、「沖縄人」であることで差別を受けたという経験もなく、私が通った小学校は沖縄出身者の子弟が多く通っており、「沖縄人」である私が突出して少数派ではないという現状もあり、「沖縄差別」という存在を知っていなかったように記憶している。しかし、小学校の高学年ぐらいになると、私は小学生なりに、自分は周りの友達と何か違うのではないかと感じたことも覚えている。その契機になったのは、私にとって、父親の存在がとても恥ずかしいと、認識しはじめたことである。スクラップ屋を生業としている、油で真っ黒に汚れた作業着姿で仕事をしている父の姿を、思春期の私には、受け入れることができなかったからである。スクラップ屋の仕事をする姿を例に出したが、スクラップ屋に対する人々の視線と、スクラップ屋に従事している人の感情は、スクラップ屋という仕事の性質と社会性に関わる大切な問題である。「沖縄人」に

多い職業のひとつがスクラップ屋だと言われているが、「沖縄人」とスクラップ屋が、どのような関係にあるのかについて、第３章で明らかにする。

本稿のタイトルである、鉄くず・鉄くず屋と、「はじめに」の最初に使用している、スクラップ・スクラップ屋との関係と、スクラップの先行研究[2)]について、述べておきたい。戦後の大阪でスクラップといえば、大阪砲兵工廠の跡地から金属を「盗み出して」売って金儲けをしたという「アパッチ族」と呼ばれた「在日朝鮮人」が、有名である。開高健の『日本三文オペラ』では、「在日朝鮮人」集落で、住居、食事風景、家族や近所の人間関係など、生活している人や生活環境について、また大阪砲兵工廠の跡地に存在する金属を「盗む」様子や、金属の種類とその価値、金属の売りさばき方について具体的に描写されている。例えば、小説に登場するキムという人は、自分の仕事を「スクラップ回収業者」[3)]であると説明している。キムに仕事を習うことになったフクスケは、金属の種類と価値について教えてもらっている。溶鉱炉や鋳物工場跡には、「イロモノ」と呼ばれる金属を溶かした滓がある。その滓が、銅である場合は、鉄に比べて値段が高いことも教えてもらっている[4)]。

私自身の生活経験として、家業をスクラップ屋と称していたこと、『日本三文オペラ』に登場する職業名が「スクラップ回収業」であることから、鉄くずなどの金属屑を扱う仕事を「スクラップ屋」と称していると思いこんでいた。本稿のタイトルの言葉である「鉄くず」、「鉄くず屋」も、私にとって馴染みのある言葉ではあるが、スクラップという言葉ほどの親近感がなかった。スクラップ屋をフィールド調査していくにつれて、実際は、鉄くず屋の方が、この生業を端的に表していることに気がついた。スクラップ屋と鉄くず屋の関係について、2013年２月から５月にかけて私が大阪で行ったフィールド調査と自分自身の経験を踏まえて、第２章で展開する。第２章でスクラップ屋と鉄くず屋の関係を展開するために、フィールド調査でおこなったインタビューに基づき、第１章で、鉄くず屋の経験を紹介することにする。

## 第１章　鉄くず屋の経験

この章では、戦後早い段階で鉄くず屋を始めた人を父親に持つ人と、鉄くず屋が始まった頃に、鉄くず屋を経験した２人、計３人のインタビューを紹介する。３人とも、沖縄出身者、あるいはその子弟で、男性である。

私がインタビューした人や私の親戚が、大阪でスクラップ屋をした時期は、戦後以降現在に至るまでの時期と確認している。なお、私がこの研究対象としている鉄くずなどの金属屑のみを扱うスクラップ屋を営んだ「沖縄人」の戦前の経験は、現時点では、確認できていない。

最初に、SGさんを紹介する。SGさんは、2013年３月30日と31日の二日間、関西沖縄文庫が主催した「大正区制80年―沖縄を唄う・映す・語る――大正区から見える沖縄の歴史・文化・生活」という催しに、来場してくださった方である。私はこの活動に関わることになり、大阪における沖縄人の活動がわかる写真パネルや年表、大正区の地図や書籍、品物などを展示した。その展示をじっくり見ておられた方が、SGさんである。この活動に関わっておられる大正区の「沖縄人」の先輩である金城宗和さん[5)]が、SGさんを紹介してくださった。宗和さんとSGさんは、親しい間柄のようで、宗和さんからの紹介ということもあり、私のインタビューの申し出を快く引き受けてくださった。活動直後の2013年４月４日、SGさんのご自宅を訪問し、お話を聞かせてもらった。

SGさんは、地域の少年野球の指導をしておられ、気さくでおおらかな様子で、話してくださった。SGさんは、1949年、大正区の北恩加島で生まれた。実家は万歳橋にあったが、1946年一般戦災復興事業が実施されたが、1948年以降西部低地区復興事業に切り替わり、全面盛土をして地盤をあげる事業が実施された[6)]為、1960年平尾へ移転した。彼の父は、沖縄で生まれ、徴用で関東に出ていたが、戦争が終わり、北恩加島にいた親戚を頼って、大阪へやって来た。父の最初の仕事は馬曳きで、製材からでる廃材を馬車に積んで、市内を売り歩いていたという。SGさんの父親が鉄くず屋を始めたのは、「朝鮮動乱」の頃で、北恩加島では、２番目か３番目ぐらいだったそうだ。その時点では、大正区内近所の町工場は、すでに他の人の得意先になっていたため、トラックを購入して、遠い所まで行かなければならなかった。得意先は、近い所では、西区・港区・此花区、遠い所では、城東区放出の方面だった。

得意先を得るには、金属を扱う町工場を一軒一軒回る。その工場の中には、髪の毛にパーマを充てた形状に似ている、螺旋状にふわふわした鉄の削りくずが、機械の周囲に山積みになり、それが踏み固められて工場の一角を占拠しているところもあったそうだ。その場合は、その鉄の塊を掃除するということで、鉄くずを売ってもらうことができる。掃除の結果として、工場も綺麗になるため工場主にも喜ばれる。得意先の規模に応じて、鉄くずの出る量を推測し、毎日顔を出す所もあれば、週一回顔を出す所もある。そうしているうちに、ドラム缶など自分専用の入れ物を工場に置かせてもらうことができれば、一人前の鉄くず屋になる。SGさんの場合は、1963年、中学２年生の時に、自宅に電話[7)]が入ったので、得意先に置かれている入れ物が、鉄くずでいっぱいになると、得意先から電話連絡が入り、鉄くずを引き取りに行くということだった。自宅に電話が設置される前は、近所の商店に電話を取り次いでもらっていたそうだ。

彼の場合は、大学を卒業後、一時ほかの仕事についたのだが、1980年頃、父親の仕事を受け継いだ。このときに、父親が開拓した40軒ほどの得意先も、一緒に引き継いでいる。

その得意先は、主には町工場で、プレス屋（型どり）が多かった。買い取った鉄くずは、金属だけ扱う寄せ屋に持って行った。寄せ屋で売るときの値段は、問屋のメーカーの言い値であるため、損をしないように目利きを鍛えなければならないということであった。

SGさんは、自分で新たな得意先を開拓することはなく、父親から継いだ得意先を丁寧に回っていた。SGさんについては、得意先の変更はなかったが、廃業していく町工場もあるということだった。

続いて、戦前生まれの二人のインタビューを紹介する。一人は1935（昭和10）年生まれのGJさん、一人は1933（昭和８）年生まれのMSさん、ともに男性である。

GJさんとMSさんは、製鋼原料商を営むSKさんのところで仕事を覚えたあと、二人で独立し、共同経営していた。SKさんは、1934年16歳のときの大阪に来て、久保田鉄工所などで働いたあと、結婚し、1943年に長女が生まれたが、その二日後に徴兵され中国へ渡った。戦後、大阪で妻子と再会し、家族で沖縄に引き揚げるが、大阪に戻ってきた。SKさんが沖縄から大阪へ戻ってきた時期がいつかわからないが、戦後早い段階で、大阪にきたことは間違いない。大阪に戻ってきた当初、親戚が営む馬力の仕事を手伝い、その後、大八車で製鋼原料の運搬をはじめ、1955年に製鋼原料商として独立（この論文では、以下SK商店とする）したという[8)]。SKさんと私の祖母は姉弟のような間柄であり、私の父にとっては叔父のような存在であった。1965年中学を卒業した父は、SKさんを頼って大阪にやってきた。父の兄もSKさんのもとで仕事をしており、父もそこで働くつもりだった。しかし、SK商店に空きがなかったこと、たまたまMSさんが病気で休職していたこともあり、父はMSさんの補欠として、GJさんのもとで働くことになった。

私はGJさんと面識がないため、最初、私の母親に連絡してもらい、その後、私が直接連絡をとり、インタビューをさせてもらうことになった。叔父の妻が経営する喫茶店で待ち合わせをすることにした。GSさんと待ち合わせをしているが、顔を知らないのでGSさんが来たら教えてほしいことを、お店を手伝っている従姉妹に説明して、私はお店の隅のテーブルで待つことにした。それから、間もなくして、GJさんは、お店にいらっしゃった。席につくと、GJさんは、私からインタビューされることを不思議に思ったそうだが、私がスクラップ屋を研究していること、父が最初にお世話になった方であり、両親が知っているなかで、スクラップ屋に従事した年長者の一人で、古い話を聞かせて欲しいことを説明すると、快く話してくださった。

1935年生まれのGJさんは、堺で小学校を卒業し、1949年大正区の北恩加島へやってきた。GJさんは、戦後の北恩加島と鉄くず屋について、次のように語った。

戦後、（北恩加島辺りは――筆者の補足・注。以下同様）みんな焼け野原だった。

昔はな、沖縄の人（の仕事）っていうたら、大正区でやったら、製材が多かった。製材所、木工。ようそこで働いとった。製材所とか。そうして、そこに女の人かな、仕事ない人やったら鉄拾い。当時スクラップでも値段あがっとったもんやから、「朝鮮動乱」とかあってね、それでちょっとしたら女の人でもバケツに一杯道から釘とか拾ったらな、昔の道は幹線道路しか舗装されてなかったから。その時やったら、磁石で釘ひろってバケツに一杯あったら、その日のおかず代もあった時代やねん。その昭和24、25年からずっとやな、鉄拾いとか、みなもう行ってるわな。鉄拾いっていっても、焼け跡の工場とか、ため池とか、そういうところに探しに出よったわけですわ。それは、普通は、一般的なもんやな。それはその日暮らしの仕事やな。そうこうするうちに、沖縄の人はね、製材がようけあったからね、材木いうたらおかしいな、廃材、木やな、焚き物、薪にするわけや。それを地方にみんな売りに行っとったわけや。沖縄の人、それが多かったんやな。その当時はカタビキ[9]に積んだり、大八車やな。リヤカーとかな。その当時で田舎の人（沖縄の人のこと）でもな、馬力持ちも多かった。昔の運送業やな。製材の材木とか運んだりしよった仕事。それで多かったわけやな。昔は、トラックとか車がようけ無かった時代で。昔は馬ようしよった（馬をよく使った）からな。地方に薪を売りに行くわけやな。

最初馬力とかカタビキとか多かったわけや。そこへもってきて、身内なりみんな鉄拾いしてるもんやし、またある人は知恵ついてな、鉄工所いうの、鉄工所に旋盤の削りかすいうの、ダライコ[10]とかな、そういったのに目をつける人がおったわけや。それやったら、もう周期的に出るわけや。１週間なり、２週間したら又たまるわけや、仕事するから。そこに目つけて。そういうの、頭賢い人やな。ずっと続く商い、言うんかな、そういう風に目着けたわけや。それをあちこち鉄工所行って、買ってきて。それを、今の集荷所かな、そこに持って行って、売り買いして、商売しようとしたわけや。それからの始まりやけどね。最初は皆、車（自動車）なしで、カタビキとかリヤカーとか、馬力持っとったら、馬力でしよった（運んだ）わけや。それがだんだんちょっとして、ちょっと小金ためて、今度それから、車、三輪車いうの、買って。それからの始まりで。また、あちこち、遠いところまで行くようになってな、商売だんだん広がっていった感じ。

GJさんの「ダライコとかな。そういったのに目をつける人がおった」、「ずっと続く商い」という言葉は、生業が成立する契機を示している。

戦後、その日一日のおかず代を得るため、道に落ちている釘などの金属を集めることが、女性や子どもによって一般的に行われていたという。つまり、道に落ちている金属を集め

ることは、その日のおかず代を得るという、「その日暮らし」を成り立たせることを意味するという点で重要である。しかし、それを広い意味で捉えると、道に落ちている金属を集めるぐらいでは、「その日暮らし」はできても、生活そのものを成り立たせるための収入にはならないことをも、意味するのである。鉄工所で定期的にでる鉄くず（ダライコとも言う）に目をつけ、それを定期的に確保することで、「ずっと続く商い」が始まった。そのことは、鉄くずが商売として成り立ち、生業になっていくという、重要な意味を持ったのである。

また、GJさんは、「馬力やな、今の運送屋。そういう人はあちこち行くからな、どこに何があるか分かるから、そういう人らが伸びてるわ」と、興味深いことを教えてくれた。自分の生活している空間、どこに何があるのか知っているというのも、重要な視点である。今でいう運送屋の馬力は、物を運ぶため、道や地名、どこに何があるのかを、仕事をするなかで、よく知るようになるということである。一例だが、私の父が、沖縄から出てきて、吹田（すいた）をフキタ、大和郡山市（やまとこおりやま）をヤマトグンザン市、我孫子（あびこ）をガソシと呼んで、怒られたという。今では笑い話として父は語ってくれるが、地名を把握できないことは、仕事をするうえで、不利なことである。それゆえ、どこに、何があるのか、地名を聞いても、それがどこなのか、どのようにしてたどり着くことができるのか、を把握しているかが、鉄くず屋にとっても、重要なことなのである。

鉄工所から定期的に出る鉄くずに目をつけた視点は、馬力として働くとき、周囲を観察していたからこそ、発見できたことではないだろうか。この、二点が合わさったとき、ようやく、生業として鉄くず屋を始めることができたのである。

最後に、MSさんへのインタビューを紹介する。MSさんは、私が子どものころから、顔なじみである親戚のおじさんである。私が小学生の頃、お盆にMSさんの家を訪問したこともあり、従姉妹とMSさんの家に一度だけ泊まったことがある。MSさんの末娘は、私より６、７歳程年上だが、とても面倒見がいいお姉さんで、私は親しみをもって「〇〇ねえちゃん」と呼んでいた。今回、インタビューをお願いしようと、2013年４月４日、MSさん宅に電話をすると、MSさんの妻KY[11]さんが電話口に出られた。私が、スクラップ屋を調査しており、親戚の年配であるMSさんのお話を聞きたいことを伝えると、この時は、都合がわるく、対面することはできなかったが、KYさんはMSさんに快く電話をつないでくださった。この電話で、30分程、お話を聞かせてもらうことができた。電話によるインタビューだったので、録音できず、電話を聞きながらのメモであるため、かぎかっこ内はMSさんの言葉であるが、それ以外は私が理解したことである。

MSさんは1933年生まれで、1952年19歳のときに沖縄から大阪に来た。最初の２年ほどは、材木屋で担ぎの仕事をやっており、「製材で肩はげて、ものすごいしんどいめをした」

と語った。その後、叔父であるSKさんのところで働くことになった。SKさんは、私の父方の親戚にあたり、親戚のなかで、鉄くず屋の草分け的存在である。GJさん、MSさんをはじめ何人もが、SKさんのもとで働き、仕事を覚えたあと、独立していった。MSさんは、SKさんのもとで働き始めた当初は、鉄くずをリヤカーに積んで運んでいた。その後、SKさんは、バタコ（オート三輪車のこと）を購入したということだった。荷の引き取り先である鉄工所について、近い所では、大阪市内、特に、西区、此花区、淀川区で、遠い所では、大阪市に隣接している豊中市や東大阪市だったという。得意先は、大きな工場ではなく、町工場であった。人力で運んでいた時は、リヤカーに１トンぐらい積んだと記憶している。一般的に、カタビキ、リヤカーでは、約500キログラム、馬力は１トンぐらいの荷を積んで運んでいたそうだ。MSさんは、約200から300キロに荷物だと、リヤカーでも一人で運ぶことができるが、800キログラムから１トンになると「（大浪橋を）二人でもようあがらんかった」と回想している[12)]。

GJさんも、MSさんも、荷を運ぶ苦労を、同じように言っておられたのが、非常に興味深い。大正区は河川で囲まれている為、大正区以外の所に荷物を運ぶには、橋を渡らなければならない。木津川に架かる大浪橋は、勾配が急で、荷物を運ぶことが、相当に難儀な仕事であることを象徴する場所ではないだろうか。

馬力で荷物を運ぶときも、大浪橋を渡る前に、橋のたもとにある、水飲み場で馬に水を飲ませ、一気に橋を登り、渡っていたそうだ。カタビキやリヤカーは、荷を多く積むと、一人では遠くまで運ぶことができないため、通常は二人で運んでいたという。馬力ですら一気に大浪橋を駆け上がらなければならないが、人力である、カタビキやリヤカーに荷を積んだとき、勾配が急な大浪橋を直進して進めず、橋の巾をうまく使ってＳ字を書き、勾配を緩くして、上がったそうだ。また、橋を下る時も大変で、車輪に車止めを置き、車が加速しないように用心して下らなければならなかった。GJさん、MSさんとも、自ずから大浪橋を越えるときの苦労を話してくださったことから、馬力や人力で荷物を運ぶとき、自動車が導入される以前は、急勾配である大浪橋は、よほどの難所だということを知ることができる。

仕事をするときの服装は、地下足袋、乗馬ズボンで、「ズックはいてはできひん」というほどに、重労働であった。

彼が大阪に来た頃、「沖縄人や韓国人は企業がとらんかった。しゃあなしに、鉄屋とか重たいもの担いだり、大変やった。人がせん仕事ばっかし」と語っており、沖縄からも集団就職者を集めるまでは、企業には入りにくかったのだろう[13)]。

MSさんの語りは、先述した、鉄くず商売をして伸びたのは、馬力をしていた人たちであったということを、証明しているのではないだろうか。鉄くず屋で働く以前の職業であ

った馬力、カタビキやリヤカーを引く仕事、製材などの担ぎの仕事は、まさしく肉体労働である。鉄くず屋も、鉄くずをカタビキやリヤカーに積んで運ぶ、という肉体労働なのである。鉄くず屋という仕事は、突然始まった職業で、誰もが簡単に始めたように見えるが、そうではない。肉体労働は、誰もが簡単にはじめられるのではない。重たいものを担いだり、運んだりという、「人がせん仕事」ばかりをしていた、「沖縄人」や「在日朝鮮人」が、肉体労働を経験していたからこそ、鉄くず屋を始めることができたのである。

GJさんとMSさんが、ともに大浪橋のことを話したのは、偶然ではないだろう。大浪橋の語りから分かるのは、人力で重たい荷物を運ぶときの苦労である。この苦労があるからこそ、バタコと呼ばれたオート三輪車の導入が大きな意味を持つ。そして、GJさんの「三輪車いうの、買って。（略）あちこち、遠いところまで行くようになってな、商売だんだん広がっていった感じ」という言葉には、バタコの導入によって、「あちこち、遠いところまで行く」という、空間的広がりを示唆しているのである。カタビキやリヤカーに比べ、移動可能距離は、飛躍的に伸び、荷物を運ぶという苦労が軽減されたことは、想像するに難しくないが、実際に働いている者にとっては、大きな変化である。ここでは、示唆されていないが、荷物を運ぶ時間の短縮、またその短縮による荷物の取り扱い量の増加もまた、仕事をこなす上で、重要なことである。

それでは、鉄くず屋を始めるにあたり、どのようにして得意先を獲得していったのか、GJさんのインタビューを紹介しよう。

GJさんは、21歳の時、親戚であるSKさんに、「ちょっと来てくれないか」と頼まれて、鉄くず屋で働くことになった。そこで、車の運転免許を取って、荷の引き取り、引き取った荷を倉庫で集積し、ある程度の荷がたまれば、車に積んで、集荷所へ荷を降ろし（売り）に行った。トラックの運転手をしているうちに、仕事のノウハウを覚え、一緒に勤めていた、MSさんと、二人で独立した。GJさんは、営業のときの話をしてくれた。

独立した頃は、得意先がなく、フリーで一軒一軒、町工場や鉄工所を回った。しかし、いくら回っても、既に同業者が鉄くずを回収しており、自分たちの得意先になってもらうためには、同業者のやっている仕事に割り込まなければならなかった。多くの町工場や鉄工所は相手にもしてくれないが、時々は、「誰が取りにくるの？」と聞いてみて、鉄くずの引き取り手が「沖縄人」であれば、遠慮していたという。しかし、「沖縄人」ではないようであれば、最初は高いお金を出して鉄くずを買っていた。最初の数回は、利益がでるかでないかの値段で購入し、取り引き相手の信用をつけていったそうだ。GJさんは、信用の大切さを、以下の様に語っている。

回ってくる人が沖縄の人やったら、遠慮させてもらった。中には、割り込んでいく

人もいたよ。儲かる範囲で最初は、高く買って。だんだん、信用得る。信用問題。（得意先で荷を）積んでもな、後片付け綺麗にするとか。積んで汚れるでしょ。そこをな、掃除でも中途半端にして帰る人と、綺麗にして帰る人やったら、その店側にしたらな、綺麗にしてもうた方が嬉しいやん。隣近所の手前も。そういう風なんもあったわけや。ただな、値さえ高くこうたらええという問題やなかった。

自分たちで仕事を始めたとき、相手の仕事場とその周囲を綺麗に掃除することによって、信用を得たことがわかる。このことが、どのように重要であるかは、第２章で言及する。

第１章では、戦後の大阪で、「沖縄人」が鉄くずに目をつけ、それをどのようにして生活できる商売として成り立たせていったのかを、３人のインタビューから明らかにした。

## 第２章　鉄くず、鉄くず屋とは

第２章では、鉄くずと鉄くず屋の仕事、および鉄くず屋とスクラップ屋の関係について紹介する。鉄くず屋を、現代風に表現するとすれば、鉄のリサイクル屋である。鉄のリサイクルに関しては、戦前から行われていたことは、金達寿の「塵芥」という小説[14]から知ることができる。船渠から塵芥として排出される金属くずを回収し、問屋に売って儲ける地元の漁師や朝鮮人の姿が描かれている。また、小説に登場する古鉄商は、私が研究対象としている、戦後の鉄くず屋のつながるものではないかと予想している。鉄くず屋の仕事を簡単に説明すると、金属を加工するときにでる金属くずを鉄工所などから購入し、それを集荷所と呼ばれる問屋や、製鉄所に売り、その売買の差額で利益を得る商売である。主に取り扱うものは、得意先が小規模経営の町工場である場合、キリコやダライコ、スクラップを引き取りに行ったという。キリコ・ダライコは、旋盤で鉄を削った鉄くずのことで、名称が異なるだけである。スクラップというのは、鉄板やアングルの切れ端のことである。金属加工の工程のほか、工事現場で排出されるもの、古くなった機械に含まれる鋳物も、スクラップである。それゆえ、これら鉄くずやスクラップの両方を扱っているので、この生業のことを鉄くず屋、スクラップ屋といい、どちらの名称も存在する。一般的に、鉄工所側は鉄くずを回収する業者のことを鉄くず屋、この鉄くずを扱っている人たちが自分たちのことを通常、鉄屋とかダライコ屋と呼んでいるが、ダライコ屋の方がずっと親しみ深い言葉である。小規模の鉄くず屋は、鉄くずを問屋に売りに行く。規模の大きい問屋は、自己資金、自分の倉庫など仕事ができる場所を持っているため、大量の鉄くずを買い集めることができる。製鉄所に売りに行くことができるのは、一定量以上を買い集めることのできる問屋に限られている。それゆえ、鉄くず屋とひとことで言っても、一人二人で経営している個人商店もあれば、何人もの従業員を雇っているところもある。

金達寿の自伝にも、金の母親が購入した自宅についていた古い車庫と、自宅の裏にある海岸の空地を利用して、品物置き場や品物を選別する場所として使っていたことが記されている[15)]。ここで、選別という言葉が登場したが、鉄くず屋にとって、選別はとても重要な作業である。というのは、鉄工所などから出る金属くずは、実は鉄だけではないのである。鉄以外には、銅、真鍮、砲金、アルミなどがある。鉄工所でも、鉄や銅などを分別されていない物を引き取る場合、鉄くず屋は、作業場で、金属を種類ごとに選別し、問屋に持っていって売るのである。そのとき、丁寧に選別されていれば、その金属の相場で売ることができるが、選別されていなければ、低い価格での買取になる。磁石にくっつく性質をもつ鉄を選別することは簡単だが、真鍮や砲金は銅の合金であるため、銅と真鍮と砲金を区別するには修行が必要で[16)]、一般に鉄くず屋では、これらをひとまとめにして売っていたそうだ。

それでは、新たに鉄くず屋を始めるとき、どのようにして得意先を獲得していったのだろうか。第１章で紹介したGJさんの語りから２つの重要な点が浮かび上がる。

一つ目は、得意先にすでに決まった業者がいる場合、割り込まなければならないと言うことである。その場合、通常の値段より高値を出してでも、買い取るということである。この商売は、一般の商売とちがい、一般の商売でいう「仕入れ」が難しいのである。相手から売ってもらえないと、扱う品物が無いのである。一般の商品であれば需要が増えると、増産されるが、くず鉄の場合、供給量は決まっているのである。それゆえ、供給量の決まっている品物の場合、手に入れるためには、高値を出さざるを得ないのである。少々高くても、極端に言えば、損をしてでも、品物を手に入れなければならないのである。そうしなければ、その品物は、高値でも同業者が手にいれることになり、競争に負ける。つまり、くず鉄の出る業者の仕事が少ない時期、景気の悪い時は、鉄くず業者間の競争は厳しくなるのである。

SGさんの父親の鉄くず業への参入の時期は、早い段階だったので、SGさんからは、このような話を聞くことはなかった。現在大正区で塾を経営しており、父親が鉄くず屋をしていた金城宗和さんからは、興味深いとともに、考え深い話を聞いたことがある。

宗和さんのお父さんが夜家にいると、キャバレーから電話がかかってきて、お金を持って出ていくというのである。それは、得意先の人から「接待」をするために、呼び出されるのだ。宗和さんの父も、GJさんと同じように、新たに得意先を回るとき、最初の４回目ぐらいまでは、余分にお金を出し、鉄くずを相場より高値で買って得意先を得ていたという。そのことを示すエピソードとして、近所の飲み屋や道路で、酔っ払ったおっちゃんたちが、自分の得意先を取った取らないと、殴り合いのケンカをしているのを、しばしば見たということを聞いた。

GJさんは、新規開拓の時、開拓先の引き取り手が「沖縄人」であった場合、遠慮したそうだが、そうではないことも多かったことが分かる。商売の仕方が個人の性格や手法によって違うと言ってしまえばそれまでだが、鉄くず商売も、きれい事ではすまされない、競争の厳しい商売であるといえる。

二つ目に、得意先の信用をえるためには、「お金」だけではないという点についてである。私は、MOさんのインタビューで興味深いことを教えてもらった。MOさんは、SKさんの次男で、1952年生まれである[17]。MOさんからも鉄くず屋は「箒で始まり箒で終る」と、掃除が如何に大切なのかを教えてもらった。町工場の店先に鉄くずが落ちていたとすると、そこを通がかった自転車がパンクして、その町工場の印象に関わる問題があるのだという。この「箒で始まり箒で終る」という言葉から、鉄くず屋の商売に対する社会の視線を伺いしることができるのではないだろうか。得意先に対して、ただ高い代金を払うだけではない、得意先に迷惑をかけてはいけない、さらに言えば、得意先の印象を良くする、という配慮が必要なのである。

以上の二つの点は相反するものであるとともに、同時に必要なことでもあるのだ。

二つ目の点について、鉄くず屋が、相手の信用を得るために、そういった配慮をすることはとても重要なことである。鉄くず屋という仕事は、いわゆる鉄くずの塵芥を片付けるという側面がある。鉄くず屋にとっては重要な物でも、鉄工所にとっては不必要な物である。その塵芥を回収するときも、工場が始まる前の早朝であるなど、相手の仕事の邪魔にならいようにすることが、仕事の基本である。そして、相手の迷惑にならないようにという心遣いはいうまでもなく、相手に喜んでもらえることを考えた上で、自分たちにできる最大のサービスこそが、掃除だったのではないだろうか。

さらに二点について考えてみたい。まず、どのような場所で、鉄くず屋を営んでいたのだろうか。SK商店は、クブングヮー[18]にあり、区画整理で移転したあとの土地の権利を持つ人から借りて、使用していたそうだ。GJさんとMKは独立後、SK商店の一角を借りて仕事をしていたそうだ。その後しばらくして、尻無川の川べりで、区画整理で移転し、まだ権利のある土地を、所有者から借りて使っていたそうだ。

次に、鉄くず屋の取り引き相手についてである。日本の経済成長と深く関わるのである。MSさんは、「最初（は）、365日仕事なかった。だんだん鉄鋼関係が増えて、（自分たちの仕事が）大きくなるし」と、私に語った。「最初」というのが、SK商店に働き始めてのことなのか、GJさんと一緒に独立した後のことであるのか、時期を確認することができなかったが、「だんだん鉄鋼関係が増えて、自分たちの仕事が大きくなる」という言葉には、鉄鋼関係の仕事が増えていった時間の経過を、読み取ることができる。

GJさんは、大阪で鉄工所が増えたあと、町工場が東大阪の金物団地に引越したり、得

意先の人から新たな工場や、ボルト会社の下請けの農家などを紹介してもらって、得意先がいろんなところへ広がっていったという。それを示す一例として、父から教えてもらったことを紹介しよう。

1965年から1969年まで、SK商店で仕事をしていた父から、仕事の内容を教えてもらった。SK商店で取り扱っている品物は、鉄くずとスクラップの割合が約７対３だったそうだ[19]。仕事内容は主に、鉄工所などで荷を引き取り、作業場で仕事をし、集荷所や製鉄所などのメーカーに持っていくというのだった。仕事場では、鋳物をハンマーで叩き割る仕事が多かったそうだ。この頃、機械は存在していたが、機械を購入する金額に比べ、人件費の方が安かったため、人間の肉体労働が主な動力であった。また、朝８時に始まり、夕方の５時から８時頃に終わるというのが一般的だったのが、1969年頃になると、仕事が忙しくなり、２日に１日は、夜の２時頃まで仕事をしていたそうだ。また、センダラと呼ばれる鋳物くずを、滋賀県彦根市の得意先で手積みでバタコに載せ、名古屋市や岐阜県大垣市の鋳物製造メーカーに持って行って、人力で降ろして、大阪に戻ってくるという、２日がかりの仕事も頻繁にあったそうだ。父がSK商店を辞める頃は、仕事が本当に忙しかったという。

私は父の話をきいて、子どもの頃、私たちきょうだいは母から、「公務員など安定した職業につきなさい」と度々言われていたことを思い出した。それは、父の仕事が、肉体労働がいかに厳しいかということを母は知っていたからであるのだが。父は、進学したかったようだが、大阪に出稼ぎに来た。父に、「スクラップ屋の仕事はしんどいか」と尋ねると、「しんどない。農業の方がまだしんどい。漁はもっとしんどい」というのである。父の実家は半農半漁で、ほぼ自給自足、電気もガスもない生活だったそうだ。小学生になると、夜中に起こされて漁に連れていかれ、また朝は畑仕事をしたあと、学校に行ったそうだ。子どもの頃から、体力を使う仕事は慣れていたので、このような労働も苦にならなかったというのだ。

以上、第２章では、鉄くずがどのような物であるのか、それがどこから売ってもらうことがきるのか、得意先をどのようにして開拓していったのかということを明らかにした。

## 第３章　鉄くず屋という生業をめぐる「沖縄人」の思い

第３章では、筆者の子ども時代の経験と、鉄くず屋の「汚れ」を紹介し、それらを比較することで、「沖縄人」と鉄くず屋が、どのような関係にあるのかについて明らかにする。

最初に私が経験したことを紹介したい。私が「沖縄」を意識し始めたのは、おそらく小学校５年生のときである。小学校４年生から６年生は必修クラブがあり、各自好きなクラブを選択することができた。私の通った小学校には郷土芸能クラブがあり、琉球大学出身

のN先生が沖縄の三線や民謡を教えていた。弟は４年生から６年生まで郷土芸能クラブに所属した。弟が学校で三線を習い、民謡を歌うと、沖縄の祖父母は非常に喜んでいたことを覚えている。その郷土芸能クラブが、大きなホールで開催された芸能人のコンサートに呼ばれ、舞台で歌うことになった。そして後日、その様子がラジオで放送された。弟のクラブ活動がきっかけとなり、N先生がH小学校区で主催していた子ども会の活動に母が参加するようになった。母は弟を連れて、子ども会の活動に参加し、沖縄の歌やエイサーをするようになり、とても活き活きしていったことを覚えている。私が６年生のとき、子ども会の夏休みのキャンプに家族で参加した。同じ年頃の子どもたちもいて、一緒に遊んだが、自分と趣味が合わなかったのか、特に仲良くもならず、そのキャンプが楽しかったという印象はない。むしろ、弟の活動に、なんで自分が付き合わないといけないのかが、私にはよく分からなかった。また、弟が沖縄の三線を弾き、民謡を歌うと、沖縄にいる祖父母も、大喜びになり、弟は大人たちの注目を浴びた。

ここで断っておくが、言いたいのは弟への嫉妬ではない。私は、自分で書くのも恥ずかしいが、小学校でも問題のある生徒ではなく、家ではしっかりした長女という役割で、手がかからない子どもだったように思う。私が小学校の子ども会でスポーツをしても、特に褒められたことがなかったのに、なぜ弟だけが、三線を弾き沖縄の歌を歌っただけで褒められるのか、私は分からなかったし、子どもながら「なんでやねん」と、冷ややかな目線で母と弟を見ていたと今の私は思う。特に問題のある子どもでなくても、家族の関心が自分に向かないとき、心のどこかで、寂しい思いをするのではないだろうか。

弟のクラブ活動とそれに対して私が感じたことだが、これは、マイノリティが、自分たちの文化を習得することで、自己肯定感を獲得していくという実践の成功例を紹介するという一般的な例とは異なる感覚ではないだろうか。小学校の必修クラブでは、「沖縄人」教育ということを明確には掲げていなかったが、子どもたちを通して、その保護者たちも、「沖縄」や「沖縄の文化」を肯定的に捉えられるように、というメッセージが隠されていたのではないだろうか。

しかし、このことを、私は違ったメッセージとして受け取った。今思えば、「沖縄人」であることや「沖縄」は私的領域であり、学校などの公の場で行うものではないという感覚を持っていたように思う。学校などの公の場で、自分が「沖縄人」であることを指摘されたことがあるが、沖縄差別を受けたわけではないが、とても恥ずかしかった。

次に、スクラップ屋の父を恥ずかしいと思うことと、公的場で「沖縄」を指摘される恥ずかしさは、異なる性質を持っている。小学生時代の私を分析しているのだが。前者は、社会的な恥ずかしさである。

鉄くず屋は、鉄の塵芥を処理するという仕事であり、作業着は油で汚れ、夏場は、汗で

汚れる。油についた金属には独特の匂いがあり[20]、それが汗と混ざると、独特の悪臭がするのである。油と汗の汚れは、視覚だけでなく、臭覚にも感じとることができるのである。肉体労働をしていることと鉄くず屋独特の汚れは、仕事をしている証であるにもかかわらず、それに対する世間の目は、優しいものではないのである。

太田順一氏の聞き書きで、宗和さんが紹介されており、「おやじはプライドの高い人で、どんなに汚い格好をしていても、金さえ持ってたらええんや、て言うんです[21]。」と語っている。この語りについて、「鉄くず屋はれっきとした商売であり、自分で汗水流して仕事をして稼いだお金で誰にも迷惑をかけずに生活してるんだ」という思いが、「どんな汚い格好をしていても、金さえ持ってたらええんや」という短い一文に凝縮されていると、私は解釈する。

それでは、「沖縄」と鉄くず屋の関係について、私見を述べよう。「沖縄人」が鉄くず屋になることができる社会的背景を第１章で明らかにした。しかし、そこでも、「沖縄人」が皆鉄くず屋になれるとは限らないのである。肉体労働を経験し、親戚のつてがあるなどの環境が整った場合、鉄くず屋になれるのである。また、「沖縄人」が戦後の日本社会で就職できなかったことが、「沖縄人」が鉄くず屋になったひとつの要素であることには違いない。それゆえ、鉄くず屋イコール「沖縄人」という関係ではないが、「沖縄人」の従事する生業の特徴を表していることも事実である。

鉄くず屋は、沖縄差別が顕著になった職業ではなく、具体的に生活する社会のなかで、いくつかの要素が複合的に重ね合わさることで成立した職業である。

後者についての気恥かしさであるが、それは、なぜ、公の場で私が「沖縄人」であることを指摘されなければならないのか、という問題である。また、沖縄文化を習得した者が注目をあびる構造の問題である。この二つの問題は、本稿の課題からそれるので、またの機会に論じたい。

「沖縄」に関わる領域と、鉄くず屋に関わる領域は、重なる部分と、重ならない部分がある。それゆえ、私が、鉄くず屋を営んでいる父を恥ずかしく思う気持ちと、「沖縄」に対する気恥かしさを、同じものと考えてはいけないし、沖縄文化を習得することと、「沖縄」に対する気恥かしさは、異なる問題を示していることを、確認するにとどめる。この問題を展開するのは、今後の課題としたい。

## 終わりに

鉄くず屋などは、社会学などの研究分野において、マイノリティの都市「下層社会」の雑業として、なんとなく位置づけられてきた。しかし、鉄くず屋の成り立ちや、鉄くず屋を営む「沖縄人」や「朝鮮人」がなぜ多いのかは、これまでの研究で明らかにされてこな

かった。本論文では、戦後、大阪市大正区で「沖縄人」がどのようにして鉄くず屋を始めたかの一端と、それがどのような意味を持ったのかを明らかにした。

この論文を書きながら、自分のなかにあった傷を発見し、論文を書く作業を通して、その傷が癒されていったように思う。

その傷が何かというと、金達寿や鉄くず屋の親を持つ人の、屑屋や鉄くず屋に対する「気恥ずかしさ」の様なものである。私自身、物心ついたときは恥ずかしくもなかったはずなのだが、小学校高学年になると、友達と遊んでいるときに、作業着姿の父親に道で話しかけられた時の恥ずかしさが、今も鮮明に思いだされる。その気持ちは過去のものになっていたと思っていたのだが、それは、今お心の奥底に残っていたのだ。それが、鉄くず屋の親戚や親へのインタビューなど、この論文を書く作業を通して、自分が考えていた鉄くず屋のイメージとは異なり、鉄くず屋は鉄生産と鉄リサイクルの循環のなかに位置づけられる重要な職業であり[22]、積極的に肯定できる仕事であることに気がついた。「職業に貴賤はない」といわれるが、社会の視線の中に、職業差別は確かにある。鉄くず屋の存在が差別の結果にあるということを言っているのではないが、「将来何になりたい」という質問に、子どもは「鉄くず屋」と答えるだろうか。子どもにとって、夢のある仕事なのかということを、社会に問い、社会の職業観の変化につながれば、幸いである。

また、子どもは、自分の親の職業について深く勉強し、理解しなければ、社会的職業観の影響をうけることもあり、親の職業に対する否定的感情を肯定的感情に転化することは難しいのではないだろうか。そして、都市的雑業といわれるこれらの仕事は、単に親のルーツである沖縄の文化のすばらしさを、学ぶだけでは、理解することはできない。また、実際に「沖縄人」や「在日朝鮮人」の多くが鉄くず屋を生業としているが、「沖縄人」や「在日朝鮮人」と鉄くず屋を安直に結びつけた、「常識」を問いなおすことができればと思う。

鉄くず屋を営む「沖縄人」へのフィールド調査を継続し、さらには鉄くず屋を営む「在日朝鮮人」のフィールド調査に入り、鉄くず屋における、「沖縄人」と「在日朝鮮人」の比較を行うことを、今後の課題としたい。

注

1）「沖縄人」は、本質的に存在するのではなく、社会的関係のなかで変容するものだととらえている。冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」―「日本人」になるということ』、日本経済評論社、1990年。

2）スクラップを調べ始めた当初、『船舶解体―鉄リサイクルから見た日本近代史』（佐藤正之著、共栄書房、2004年）、『日本鉄屑工業会十年史』（十年史編纂委員会編、社団法人日本鉄屑工業会発行、1985年）などの文献を見たが、私自身がそれらを先行研究として使いこなせな

かった。私にとって、スクラップや鉄くずを研究することは、とても難しいことだった。自分の生活感覚として知っていることを、論文になるように、何をどのように調べたらいいのか、分からなかった。私の困難を突破する糸口を、金達寿の小説や彼自身について書かれた文章を読んでいるときに、発見した。平田由美先生が金達寿の小説を紹介してくださったことに、感謝している。

3）開高健『日本三文オペラ』新潮社、1971年、57頁。

4）開高健『日本三文オペラ』新潮社、1971年、97頁。

5）金城宗和さんのお母さんである幸さんにお話を聞かせてもらったが、今回は私の力量不足で、今回の論文に反映することができなかった。またの機会に紹介したい。幸さんのお話を聞くなかで、幸さん夫妻は、私の父が働いていた製鋼原料商へ、鉄くずを納めに来ていたため、私の父親とは昔からの顔なじみだったこと、沖縄でも、出身地が同じ村の隣り部落であるため、幸さんのお話には、私の親戚の名前がしばしば登場することもあり、地縁血縁関係が、人の営みに具体的に関わり続けている現実を教えてもらい、過去から続いている人々の営みの重なりが、今生きている私にも関係していることを実感し、感慨深い気持ちになった。ちなみに、私は金城宗和さんとは、関西沖縄文庫の活動で、顔馴染みになった。私が研究に行き詰まったり、スクラップ屋について質問したいことがあると、宗和さんの塾にふらっと訪問しては、話を聞いてもらった。大正区の「沖縄人」であり、ありがたい先輩である。

6）大阪市役所『大阪市戦災復興誌』1958年、716-717頁。

7）電話番号簿を調べた時は、スクラップ屋を営んでいる自分の親戚の苗字だけ調べた。電話帳に記載されている親戚でスクラップ屋を営んでいる人は、姓名と電話番号、姓名の後ろに括弧括りで職業を掲載している場合がある。その職業は、製鋼原料、鉄屑、古鉄、製鋼と記載されている。この電話番号簿では、古銅鉄、廃品回収という職業名も見られるが、私のフィールドワークの対象としている職業と同業であるかは、今のところ確認できていない。1967年３月１日現在の『50音別電話番号簿大阪市―尼崎・吹田・守口の各市／東大阪市のうちの旧布施市』日本電信電話公社。

8）伊豆見元一『やまとの群星／関西に生きる沖縄の県人たち』琉球新報社、1987年、125頁。この本に紹介されていることと、私の生活のなかにおける親戚との対話などから知り得たことを、合わせて記述した。自分が生活のなかで知り得たことを、論文に記載するとき、私は、私自身が私のインタビューのインフォーマントとなり、自分の経験や知ったことを、自分自身が相対化しながら書いているつもりであるので、このような記述になった。自分が知り得た事実を論文として書くことについては、以後の課題とする。

9）紐を肩に掛けて引っ張ることができるように、紐がついた大八車のこと。

10）ダライコ（粉）は、旋盤のドイツ語である“Drehbank”から出る屑が、語源であるとされている。

11）MSさんから話を聞かせてもらったあと、KYさんは再度電話口に出て、私に親しみをこめて話してくださった。KYさんのお母さんは、私の祖母と親戚で、私の祖母がKYさんのお母さんをおんぶして子守をしたこと、そのお母さんは和歌山の紡績に出稼ぎにきたことなどを教えてくださった。わたしは、この電話でKYさんとも、直接の親戚であることを知ることになり、私は沖縄の親戚や出稼ぎ後の人のつながりを、再認識することになった。また、調査していく

なかで、私と親戚も、単に親戚というだけでない、新たな関係が形成されていったと思う。

12）筆者の電話によるインタビュー、2013年４月４日。

13）1957年12月、144人をかわきりに、沖縄から本土へ集団就職が始まった。1958年102人、1959年472人と徐々に増加し、1960年代後半は急増している。なお、本土から沖縄への求人も、1960年代後半に急増している。山口覚「沖縄から『本土』への集団就職－米軍支配下での労働市場統合と移動をめぐる諸実践－」、（財）日本統計協会『統計』第56巻第３号、2005年３月号、28-29頁。

14）金達寿、1911年朝鮮生まれ、1930年渡日。『金達寿小説全集一』筑摩書房、1980年、所収。

15）「わが生活と文学（二）仕切り屋になる」、『金達寿小説全集七』筑摩書房、1980年、所収、524頁。

16）鉄くずやスクラップの金属は、大まかに鉄、特殊金属と非鉄金属の３種類に分類される。ちなみに、特殊金属はステンレス、ニッケル、非鉄金属は通称イロモンと呼ばれ、銅、真鍮、砲金、アルミなどがある。金属には、それぞれに相場があり多くの品物を納めている個人商店は、問屋から相場表をもらう。資金に余裕のあるところは、品物を相集め、相場の高い時に売って、利益を大きくするという仕組みになっている。

17）SKさんは、戦後大阪に戻るとき、長女と長男をSKさんの母に預け、妻と次男を連れて来た。その後、仕事が軌道に乗ると、沖縄に残していた母と子どもたちを呼び寄せた。なお、MSさんとMSさんの妹も、SKさんの母のもとで育ったため、一緒に来阪した。

18）クブングヮーとは、沖縄の言葉で窪地を意味し、大正区北恩加島、小林町の低湿地帯にバラックなどが建てられた地域のことである。住民の３割から４割が沖縄人だと言われている。クブングヮーも区画整理対象となり、換地移転したあとの空地があった。

19）鉄くず屋は、それぞれが持っている得意先の性質によって、鉄くずを多く扱うのか、スクラップを多く扱うのか変わってくる。例えば、得意先の多くが、旋盤で鉄を削っている鉄工所である場合は、スクラップより鉄くずを扱う割合が大きい。

20）平田由美先生が教えてくださった小関智弘『大森界隈職人往来』岩波現代文庫、2002年からヒントを得た。

21）金城宗和「パガナヤー」、太田順一『大阪ウチナーンチュ』ブレーンセンター、1996年、50頁。

22）大阪で現役の町工場の「おやっさん」をしておられる清水良平氏よりご教示いただいた。

（うえち　みわ　関西沖縄文庫会員／沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員）